

# 神崎町西の城貝塚

—文化研修施設建設に伴う埋蔵文化財調査—

1992

千葉県教育庁生涯学習部社会教育課  
財団法人 千葉県文化財センター

# 神崎町にしのじょう城貝塚

－文化研修施設建設に伴う埋蔵文化財調査－

1992

千葉県教育庁生涯学習部社会教育課  
財団法人 千葉県文化財センター

## 目 次

### 序 文

### 凡 例

I 遺跡の位置と環境 .....	1
II 調査の方法 .....	3
III 調査の成果 .....	4
1) 縄文時代 .....	4
2) 弥生時代 .....	11
3) 古墳時代 .....	12
4) 中 世 .....	14
5) 近 世 .....	14
6) 自然遺物 .....	14
IV まとめ .....	15

### 挿図目次

第1図 西の城貝塚位置図 .....	2
第2図 西の城貝塚グリッド配置図 .....	3
第3図 縄文土器拓影図1 .....	5
第4図 縄文土器拓影図2 .....	6
第5図 縄文時代石器実測図 .....	10
第6図 弥生土器拓影図 .....	12
第7図 古墳時代遺物実測図 .....	12
第8図 溝状遺構実測図 .....	13
第9図 中世遺物実測図 .....	13
第10図 近世陶器実測図 .....	14
第11図 自然遺物実測図 .....	14

### 表 目 次

第1表 縄文時代石器組成表 .....	11
第2表 縄文時代石器属性表 .....	11

### 図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真
図版2 遺跡遠景・遺跡近景
図版3 溝状遺構全景
図版4 縄文土器
図版5 縄文土器・弥生土器
図版6 縄文時代石器
図版7 古墳時代遺物・中世遺物 近世遺物・自然遺物

## 序 文

千葉県北部の利根川に臨む台地上は、古来より豊かな自然環境に恵まれ、多くの先人達の生活や活動の跡が歴史的・文化的遺産として数多く残されております。

ここに報告する西の城貝塚もそうした先人の貴重な遺産の一つです。数次にわたる発掘調査で、我が国で最も古い縄文時代早期初頭の貝塚であることが確認され、住居跡も検出されています。昭和41年に県指定史跡となり、昭和44年には神崎町教育委員会が県費の補助をうけて鉄骨製の上屋を設け保存が図られてきました。また、昭和55年には貝層の断面を保護し、半永久的に保存することを目的とした整備もなされ今日に至っております。

千葉県教育委員会では、神崎町の要望を入れ、現在の保存施設をさらに拡充し、見学者がより観察しやすいように文化研修施設を建設することになりました。そこで事前に発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになり、記録保存に当たっては、財團法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになりました。

西の城貝塚は、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物が数次にわたる発掘調査で検出されており、中世には台地全体に城郭が構築されていることが知られていました。

今回の調査では、縄文早期の土器をはじめ土師器、中世陶磁器等を検出しました。

このたび、整理作業も終了し、その成果を『西の城貝塚』として刊行する運びとなりました。本報告書が学術資料としてはもとより、文化財保護の普及資料として広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

おわりに、発掘調査から報告書刊行まで種々御指導いただいた千葉県教育委員会生涯学習部文化課をはじめ同社会教育課、神崎青年の家、神崎町教育委員会、同建設課の御協力にお礼申し上げるとともに発掘調査や整理作業に携われた調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成4年3月

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬 良三

## 凡　　例

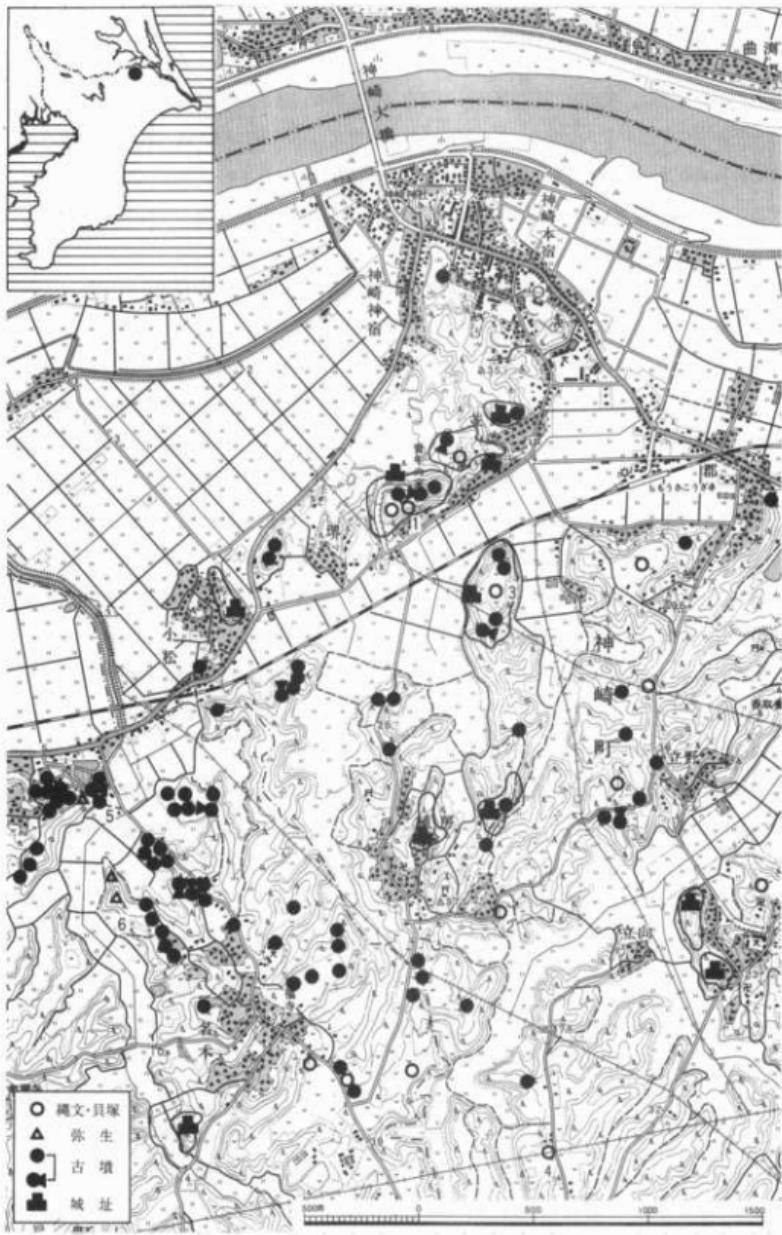
- 1 本書は、香取郡神崎町並木658他に位置する、西の城貝塚の埋蔵文化財発掘調査報告書である。遺跡コードは、342-001である。
- 2 発掘調査は、文化研修施設の改築に伴う事前調査として、千葉県教育委員会との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成3年9月2日から9月10日まで、調査部長 天野 努、部長補佐 阪田正一、班長 宮 重行の指導のもとで、班長代理 岡田誠造が担当した。
- 4 本書の編集は、班長 宮 重行の指導・助言のもとに、岡田誠造が行った。Ⅲ-2 の石器については新田浩三の協力を得た。なお、整理作業は9月11日から9月30日まで行った。
- 5 本書に収録した調査記録、出土遺物は、財団法人千葉県文化財センターが所蔵・保管している。
- 6 地形図は、国土地理院著作・発行の1/25,000佐原西部を使用した。
- 7 本書で使用した方位は、公共座標に基づいて設定している。
- 8 発掘調査・整理作業に際しては、早大名誉教授の西村正衛氏に何かと便宜をはかっていただいた。記して感謝の意を表する次第である。

## I 遺跡の位置と環境

西の城貝塚(1)は、東流して太平洋へ注ぐ利根川の左岸の、標高30~35mの独立台地上の南に寄った地点に所在する。台地は、この部分のみが利根川の沖積地に取り残されたように突出しており特異な地勢を形成しているが、北東から南西にかけては長さ約1,700m、幅は広いところで約600mを測り北側で広く南西に下がるにしたがって約300mと狭くなっている。東側に三日月形に湾曲した形状を呈する。

水田を挟んだ下総台地とは近い部位で約300mの距離があり、水田面と台地との比高差は約30mである。貝塚の所在する台地上は中世における西の城の構築等による造成工事により旧時とは形状を異にする箇所もあるが東西約300m、南北は最大で約100mのほぼ平坦な面を有し、その北東部分では西側から支谷が入り込んでいて細い鞍部状となり、更に平坦部が続いている。台地全体を概観すると小支谷が樹枝状に台地を侵食して、複雑な地形を構成している。斜面部は西側ではなだらかな部分もあるが東側では急峻な崖となっている。本遺跡の周辺には、多時期にわたって多くの遺跡が確認されている。植房貝塚(2)、田向台遺跡(3)、武田東遺跡、台阿らく遺跡(4)等は、縄文時代早期の遺物を含む散布地として周知されており植房貝塚は昭和30年に調査され、夏島・田戸下層・子母口・茅山式の土器が報告されている。また、西の城貝塚の調査では井草期の住居跡が1例検出されているが当該期の住居跡が報告された例は、近くでは成田空港No. 7 遺跡B地点で1例、No.60遺跡で7例ある。これらの遺跡は、利根川水系と太平洋水系の分水嶺に位置し、西の城遺跡が利根川本流に近く立地するのと対称的である。田戸下層期の貝塚では昭和24,25年に調査された城の台貝塚が知られる。弥生時代の遺跡は、調査例も少ないが概してごくわずかで、南西へ約1km離れた下総台地上に所在する大日山古墳群(5)、名木熊山遺跡(6)等で散布が認められる外に県道成田・下総線の新山遺跡で再葬墓が検出されている。いずれも利根川の沖積地へ開口する樹枝状の支谷に面した台地上である。

古墳時代には、利根川に直接臨む台地上に古墳が集中して構築されるようになり、解析された支谷を見おろす台地上にも造られるようになる。西の城の台地上にも詳細は不明であるが、前方後円墳とされたものを含む4基以上の古墳が存在したと考えられ、1基のトレンチ調査の結果、主体部を検出し、内行花文鏡1、鐵錐片等が報告されている。また、南東へ約2km離れた舟塚原古墳群の内の全長54mの前方後円墳の調査では、外部施設としての埴輪列と土師器、紡錘車、有孔円盤等が出土し、武田古墳群の径16~20mの円墳の調査では墳丘上から円筒埴輪が検出され、いずれも6世紀前半に比定される。集落跡では大平遺跡の調査例があり、住居跡63、土坑2他が報告されている。また、西へ約2.5km離れた利根川の沖積地を臨む台地上には石製模造品の生産遺跡の大和田玉作遺跡群が所在している。



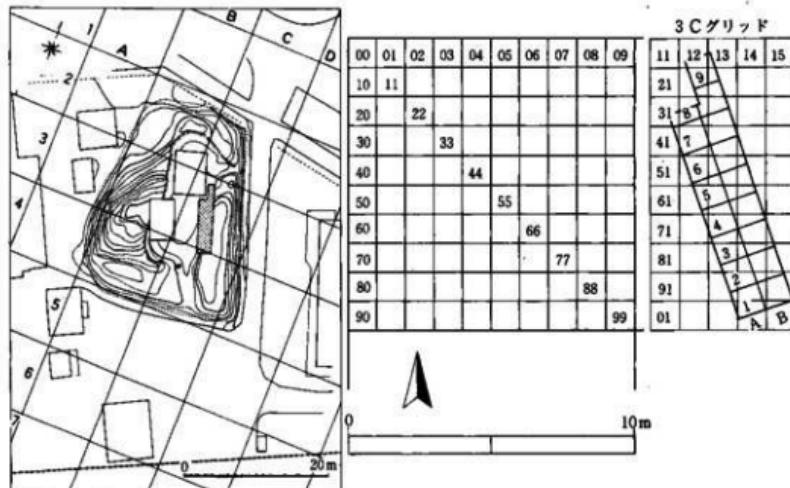
第1図 西の城貝塚位置図

## II 調査の方法

今回の調査では、現在保存整備されている部分を包括し調査範囲を明確に表すため、貝塚と  
いう遺跡の性格も考慮して、公共座標を基準に10m×10mの大グリッドを設定した(第2図)。

大グリッドは設定グリッド北西端を基準とし北から南へ数字で、西から東へアルファベット  
を付した。各大グリッドは1m×1mの小グリッドに分割し北西端を00とし、東南端を99とする  
番号で表すこととした。実際の調査区は座標北と対応しないため、任意に南端部から1m×  
1mの小グリッドに分割した。遺物はこの小グリッドを基本に取り上げた。

調査を進めるにつれ、縄文早期の土器片や円碟に混じって近世陶器、丸縁のメガネ片、石版  
片、ビニール等が出土するにおよび、土層の状況がプライマリーな状態でないことがしだいに  
明かとなった。結論から先に述べれば、今回の調査区は未調査部分ではあるが、昭和38年に行  
われた調査の際の排土によりその大部分が二次的に堆積したものであり、さらに推論が許され  
るならば、古墳墳丘下の現在保存されている箇所と井草期の住居跡の西側墳丘の一部の他は、  
発掘調査、青年の家造成等の際に発生した二次的な堆積土によるものと言わざるをえない。



第2図 グリッド配置図

### III 調査の成果

#### 1) 繩文時代 (第3、4図 図版4、5)

調査区全域より縄文時代早期の土器片が522点、石器・礫等が709点出土したが、これらは土層中の混在物及び土層の観察から擾乱層（耕土）中、及び溝内出土であり、プライマリーな層からの出土は皆無であった。この時期の遺構は検出されなかった。土器は便宜上下記のとおり分類し、記載する。

I群土器 早期撚糸文系の土器を一括する。

1類 a 口唇部が外反肥厚し、口唇部施文及び口唇部直下から横位文様帶が施文されるもの。

1は口縁部破片で、口唇部が肥厚し外反する。口唇上端に縄文(RL)を施文し、その内側にそって一条の条痕が巡る。斜位の縄文が施文され、口唇部直下には指頭による押捺が行われたことが認められる。胎土に砂粒を多く混入。2は口唇部の肥厚及び外反が僅かにみられる。縄文施文方法、胎土は1と同様。

1類 b 口唇部が外反し、口唇部施文で、口唇下の横位文様帶を有しないもの。(3~6)

3は口縁部が外反し、口唇上端に無節(R)の縄文を回転施文し、口縁直下に指頭圧痕。その下から縦位で縄文(R)を浅く施文する。やや薄手で厚さが約6mmである。焼きは良好。4は器面が剥落してはっきりしないが、縦位に縄文が施文される。胎土に砂粒を多く混入する。焼成やや不良。5は口唇部が肥厚し、その部分のみ外反する。口唇上端に縄文(RL)を施文。それ以下は無文帶となる。砂粒を多く混入。6は口唇部が外反し、縦位の撚糸による施文。

これらの土器は井草式の範疇に入る土器である。

2類 口唇部近くから撚糸文等が施文されるもの。(7~13)

7は口縁部は丸頭状を呈し、縄文(R)を縦位回転する。胎土に砂粒を多く混入。8は口縁部は丸頭状で、撚糸(1)を浅く粗に施文。砂粒を多く混入。9は口縁部がやや肥厚し、縦位の縄文(LR)を施文する。内外面に横方向のナデの後、ミガキを施す。焼成は良。10はやや薄手(6~7mm)で内面はミガキを施す。口縁直下から縄文(LR)が粗に施文される。11は口唇部がやや肥厚し、明瞭な稜を生じる。内面及び口唇部にミガキがはいる。撚糸(R)が縦位に施文される。焼成は良。12は撚りがもどりぎみの撚糸(L)が口縁部上端直下から施文される。薄手(5mm)で、焼成は良。13は口縁部が肥厚する。撚糸(R)が施文される。砂粒が多く混入する。

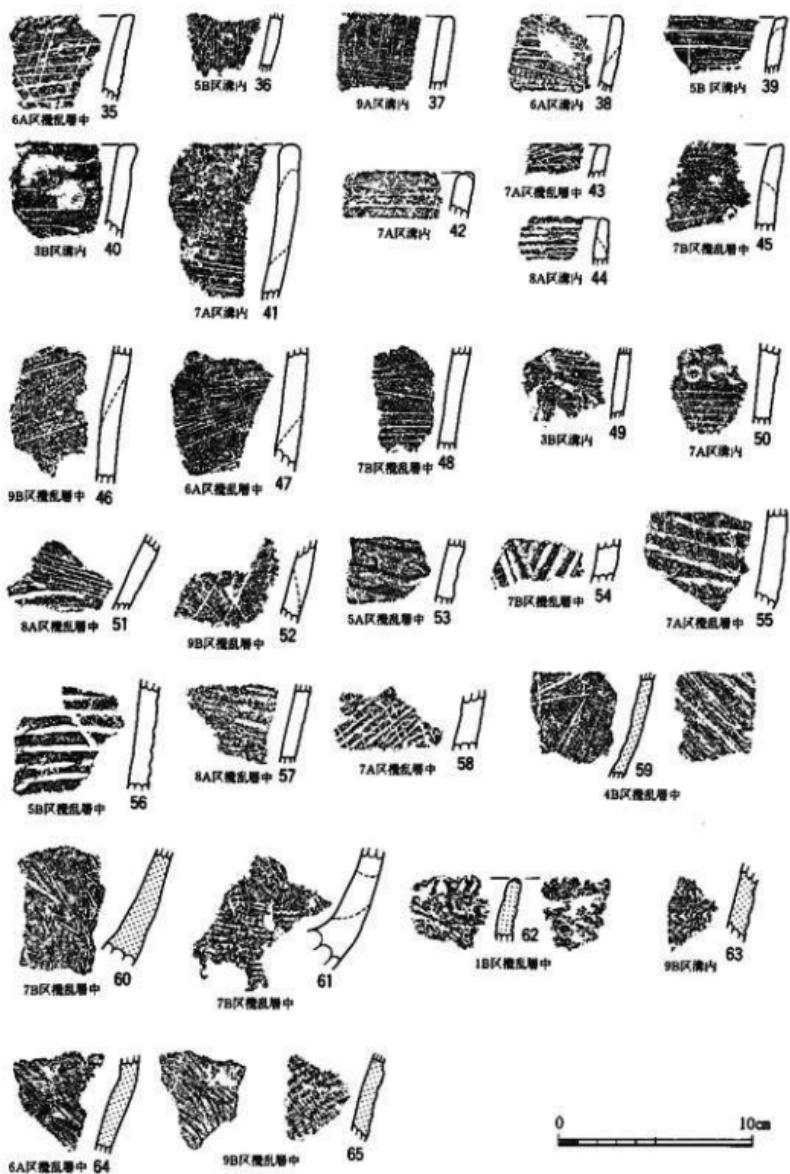
これらは夏島式から稻荷台式期の所産と考えられ、9~12は外面にミガキが入り、稻荷台式でも新しい要素を含んでいる。

3類 口唇部直下に無文帶を有しその下部に縄文等が施文されるもの。(17~19)

17は頸部がややくびれ、そのくびれ部に縄文原体(RL)の側面圧痕が施文され、それ以下の胴部に横位回転の縄文(RL)を充填する。砂粒を多く混入し、器面は艶くなっている。18は口



第3図 縄文土器拓影図1



第4図 繩文土器拓影図2

唇上端部に縦状体圧痕文（R）を連続して押捺し、約10mmほどの無文帯下の胴部に側面圧痕文に連続して縱位の密な撲糸（R、同一の原体か）を施文する。19は口縁下に約10mmの無文帯を残し縄文（RL）の側面圧痕を施文する。砂粒を多く混入。これらは花輪台式の範疇の土器である。

#### 4類 脇部破片、底部破片を一括した。

##### a 縄文が施文されるもの。（20～28、30～34）

20は脇部破片で縄文（RL）が施文される。21は底部に近い破片で、撲糸（L）が施文される。石英、長石等を多く混入する。22は底部に近い破片で縄文（RL）が施文される。破片下半は擦れて文様が消えかけている。23は縱位の縄文（L）が施文される。砂粒を多く含む。24は縱位の撲糸（R）が施文される。砂粒を多く含む。25は纖細で密な撲糸（R）が施文される。砂粒を多く混入。26は縦位の縄文（RL）を施文する。器厚は約5mmと薄手で焼成も良い。27は縄文（LR）が斜位に浅く施文される。28は撲糸（R）がやや撲りがもどりぎみに施文される。焼成は良。30は細かい条間のあいた縦位の撲糸（R）が施文される。内面の器面は粗くザラザラしている。31は縄文（LR）を縦位に施文する。内面はよく研磨されている。32は異方向の縄文（RL）を施文し、羽条を呈する文様を構成する。33は乳房状を呈する底部で、細かい撲糸（R）を縦位に施文する。下端には焼成前に豆粒状の凹みがある。34は撲糸文の付された脇部破片を利用した土製円板である。周縁部の調整は粗で良とは言えない。これらのうち20～25、33は井草式～夏島式に24、26～31、34は稻荷台式に、32は花輪台式にそれぞれ比定される。

##### b 縦条体圧痕文が施文されるもの。

29のⅠ点のみで、縦条体の圧痕文が縦位に施文される。器厚は6mmで薄手。砂粒を含む。

#### 5類 無文のもの。（14～16）

14は無文の土器で、口縁部は丸頭状を呈する。15は二次的被然で器面がザラザラしているがここでは無文として分類した。16は砂粒を多く混入する。器厚は6mmでやや薄手である。

#### Ⅱ群土器 早期沈線文系の土器を一括する。

##### 1類 細沈線の施文されるもの。（35～37、40～44、50～52、58、60、61）

35は縦位の沈線施文後に斜位の沈線を施文している。口唇部は内削ぎ状を呈し、上端外側に斜めに沈線が3mm間隔で施される。焼成は良。36は多条の縦位の細沈線を斜位の沈線で区切り一部に格子目状の文様を構成する。器厚は約5mmで薄手。砂粒を多く混入する。37は縦位、横位の沈線で文様が構成される。40は口縁部が肥厚する。器面が一部剥落しているが横位の沈線文のみ施文される。41、器面の剥落が顕著で不明瞭だが、横位のやや密な沈線文を施す。砂粒を多く混入する。42、口唇部は内削ぎ状で横位の沈線で文様を構成する。43は口唇部はやや内削ぎ状で、斜位の沈線で施文する。44は外削ぎ状の口縁を呈する推定口径10cmほどの小形土器の口縁部で、太めの沈線が横位に施文される。51は細かい斜位の沈線の下位に太い沈線が配される。砂粒を多く混入する。52は約15mm間隔の斜位の沈線で格子目状の文様を施す。砂粒を多

く混入する。58は異方向の沈線が斜位に施文される。砂粒を多く混入する。60は底部に近い破片で擦痕が外面に少し残る。61は底部破片で左半部に沈線が施される。尖底となろう。このうち35は三戸式に、36は木の根式第5類の文様に類似したものが有りその可能性もある。他は田戸下層式の範疇に入る土器である。

#### 2類 細沈線と貝殻圧痕文で文様が構成されるもの。(38、39、45~49)

38は口唇部直下から菱形の沈線文を施文し、その下を3条の横位の沈線文で区画する。その下位に横位、斜位の沈線文を施し、その間に貝殻文を充填する。39は口唇上端は内削り状で、口縁部に2条の横位の沈線を施文後にその下位を縦位の沈線で区画し、アナグラ属の貝殻腹縁文で施文している。焼成は良で内外面ともミガキを施す。45は口縁直下から貝殻腹縁文を横位に施文。その下位に沈線が一条認められる。46は一条の沈線を横位、斜位に施文し、貝殻腹縁文を充填する。47は沈線を横位、縦位に数条配しその区画内を貝殻腹縁で施文する箇所と無文のまま残すという文様構成をなす。焼成は良。砂粒を多く含む。48は一条の沈線で横位、縦位に区画し貝殻腹縁で施文する部分と無文のままの文様構成をとる。その下位に横位の1~1.5mm間隔の数条の沈線を施文する。砂粒を多く混入する。49は48とはほぼ同様な文様構成をとるもので二次的な被熱を受けている。

#### 3類 細沈線と竹管文で文様が構成されるもの。

50の1点のみで、竹管による円形刺突文と横位の沈線が施文される。砂粒を多く混入。

#### 4類 太沈線が施文されるもの。(53~57)

53は沈線が横位に施文される。破片上端が摩滅して滑らかになっている。54は太沈線が斜位に異方向から加えられ、縦位の羽状文を構成する。55は太沈線が横位に施文される。破片上端が破損していて不明瞭だが内削りの口縁部の可能性有り。砂粒を多く混入する。56は55と同様な文様を施文する。57は55と同様な文様構成で、推定内径13cmを測る。砂粒を多く混入する。上記の3類、4類土器は田戸下層式の土器である。

### III群土器 早期条痕文系土器を一括する。

62は口唇部に4mm間隔で斜位に刻みが施され、波状を呈する。繊維を多く混入する。64は内外面に浅い条痕が残る。繊維を少し混入する。茅山下層式の範疇に入る土器である。

### IV群土器 早期刺突文で文様が構成されるもの。

63はペン先形工具による連続刺突文が横位に施される。田戸上層式の範疇で捉えられるが、明神裏Ⅲ式に類例がある。

### V群土器 前期初頭の土器

65は繩文(LR)を縦位、横位に回転施文して羽条文を構成している。繊維を混入する。黒褐色の色調を呈する。花積下層式の土器である。

## ◎縄文時代出土石器

### (1)出土石器（第5図1～38、第1・2表・図版6）

出土石器総数は、709点である。石器組成は、第1・2表のとおりである。

1は二次加工のある剥片である。小形の剥片を素材として、周縁部に細かな調整加工が施されている。右側縁下部を脚部としてとらえて、石鎚の破損品、あるいは、未製品の可能性もある。2～4は楔形石器である。2は両極剥離によって生産された剥片を素材として、上下両端部に両極剥離痕と左側縁に微細な剥離痕が施されている。3は偏平な円礫を素材として、上下両端から両極剥離を施している。4は分厚い剥片を素材として、左右両端から両極剥離を施している。5は石剣であろう。あるいは、石製模造品で縄文時代の石器とは時期の異なる石器の可能性もある。全体形状は破損しているので明確ではないが、両側縁は研磨され角張っており、下端部にむかって尖った形状を呈する。5は片刃の打製石斧である。小形の偏平な礫を素材として、下端部に大きな剥離を行った後に、急角度の細かい調整加工を施している。7は全面が木の葉（？）で覆われた石器である。このような資料の類例がみられないで不明な点が多い。8～16は敲石である。8～11は細長の礫を素材として、端部に敲打痕が施されている。12～16は分厚い礫を素材として側縁部や端部に敲打痕が施されている。17～38は磨石である。すべて円礫であるが、形状は多様である。研磨によって形状が変わるほどのものはない。

### (2)出土石器の特徴

出土石器の特徴を簡単にまとめると以下のようになる。

①礫の占める割合がきわめて高く（93.7%）、これらのはほとんどすべてのものが、火熱を受けた痕跡が観察された。このようなことから、出土状況がプライマリーな状態で出土していないので明確なことはいえないが、おそらく、集石、あるいは、礫群に伴う礫である可能性が高い。

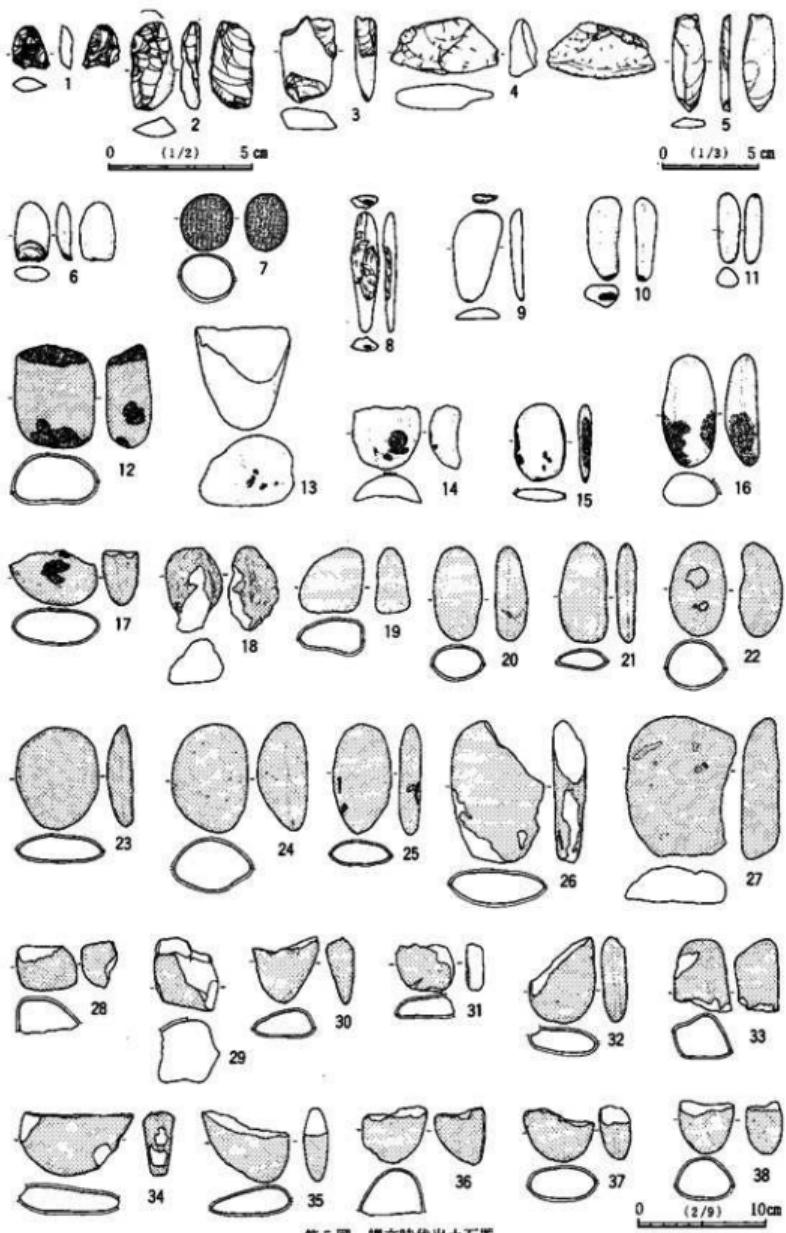
②利器の占める割合がきわめて低く、そのなかで、磨石・敲石の占める割合が高い。

③利器のうち、二次加工の行われている石器〔6点（7%）〕はほとんどなく、小型の打製石斧が特徴的な形態を呈する。

④石材組成は、石英ハン岩・チャート・砂岩の占める割合が高い（85.5%）。おそらく、西の城貝塚からそれほど離れていない利根川の河原で採取される円礫の石材組成と類似していることから、これらの円礫をもちいているものと思われる。

### (3)小結

出土石器は、火熱を受けた礫を主体とする石器群であり、ほとんどのものが同一時期の所産であることが推定できる。また、出土土器は田戸下層の土器が主体を占めていた。このようなことから、おそらく、出土した石器のほとんどのものが田戸下層の時期のものであろうと思われる。しかしながら、出土状況が悪いために、これらの共伴関係は明確ではない。



第5図 繩文時代出土石器

第1表 西の城貝塚縄文時代出土石器（総数）

石材 重量 △	点数 △	安山岩	石英 ハニカル	砂岩	チャート	凝灰岩	玉髓	花崗岩	石英	多孔質 安山岩	片麻岩	軽石	總数 (点数) (g)	組成比 (%)
楔形石器	点数				1	2							3	0.42%
	重量				4	39							43	0.19%
二次加工のある断片	点数				1								1	0.00%
	重量				1								1	0.00%
石劍	点数												6	0.03%
	重量												1	0.14%
打製石斧	点数			1									20	0.09%
	重量			20									22	3.10%
砂石	点数	1	3	11		1					4	1	1	
	重量	24	163	1811		83					207	58	33	2,179 9.45%
砾石	点数	4	4			4							12	1.89%
	重量	349	460			449							1,258	5.45%
繩	点数	2	230	147	204	58			4	19			664	93.65%
	重量	87	8,834	8,920	540	217			130	710			19,438	84.85%
刮片	点数					1	2						3	0.42%
	重量					7	9						16	0.07%
鉈片	点数			1								1	2	0.28%
	重量			1								1	2	0.01%
總点数(点数)	3	237	163	207	66	2	4	19	4	3	1	709		
總重量(g)	111	9,346	11,011	546	795	9	130	710	207	65	33	22,963		
点数組成比(%)	0.42%	93.43%	22.99%	29.20%	9.31%	0.28%	0.56%	2.68%	0.56%	0.42%	0.14%			
重量組成比(%)	0.48%	60.70%	47.95%	2.38%	3.46%	0.04%	0.57%	3.09%	0.90%	0.28%	0.14%			

第2表 縄文時代石器属性表

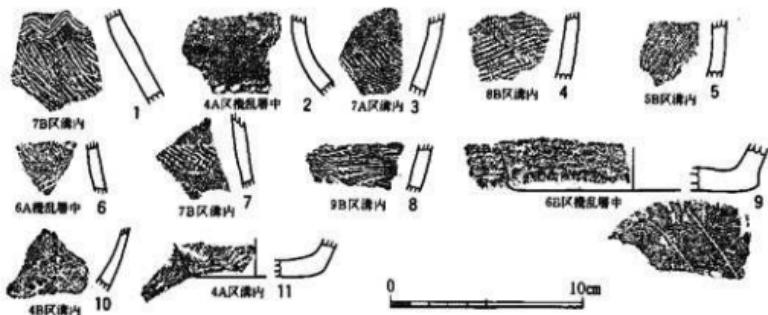
図版 番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	遺物番号	回版 番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	遺物番号
1	二次加工のある断片	チャート	14.0×14.8×4.7	0.8	48	20	磨石	石英ハンカル	71.0×38.2×24.0	92.6	6A区
2	楔形石器	チャート	30.5×15.2×6.9	3.6	7B	21	磨石	砂岩	76.4×37.9×15.5	71.2	8B区ミゾ内
3	楔形石器	磨灰岩	45.8×29.7×11.1	19.4	6B区ミゾ内	22	磨石	砂岩	72.0×43.6×33.7	128.0	057
4	楔形石器	磨灰岩	30.0×56.5×13.5	20.3	6A3	23	磨石	砂岩	77.5×64.5×19.3	141.8	9A一括
5	石劍	片麻岩	51.2×17.0×5.1	6.1	254	24	磨石	砂岩	82.8×58.0×38.5	243.1	8A区ミゾ内
6	打製石器	砂岩	45.8×26.8×11.0	19.9	708	25	磨石	砂岩	83.4×45.5×16.3	100.3	8B区ミゾ内
7	繩	石英ハンカル	44.3×39.5×32.8	84.0	3B区ミゾ	26	磨石	砂岩	108.5×72.5×25.0	266.2	8A区ミゾ内
8	鉈石	磨灰岩	93.0×21.0×10.1	21.1	0149	27	磨石	砂岩	107.8×85.3×28.3	280.9	4B区ミゾ
9	鉈石	砂岩	72.0×38.5×9.5	35.2	4B	28	磨石	石英ハンカル	34.2×46.0×27.3	51.2	0235
10	鉈石	磨灰岩	65.5×26.0×17.0	36.5	表記	29	磨石	砂岩	56.1×50.4×48.8	150.1	4B区ミゾ
11	鉈石	砂岩	56.1×17.4×13.8	21.7	7A	30	磨石	砂岩	50.0×52.2×30.2	50.9	6B区風塵
12	鉈石	砂岩	78.2×62.5×35.2	268.8	2A区ミゾ	31	磨石	多孔質安山岩	36.2×45.7×13.4	17.0	2A区ミゾ
13	鉈石	磨灰岩	79.0×74.0×54.1	354.0	226	32	磨石	砂岩	64.4×51.8×19.8	82.8	0068
14	敲石	石英ハンカル	49.5×48.5×24.0	61.2	237	33	磨石	砂岩	54.4×45.1×33.5	98.4	8B区ミゾ内
15	敲石	磨灰岩	56.5×39.0×10.0	37.0	919	34	磨石	石英ハンカル	48.8×88.5×24.0	124.3	7B区ミゾ内
16	敲石	砂岩	85.8×42.6×25.6	133.6	9A区ミゾ内	35	磨石	石英ハンカル	55.5×67.5×18.7	73.0	212
17	磨石	石英ハンカル	41.7×68.5×28.5	18.9	9A-1	36	磨石	石英ハンカル	44.0×38.6×38.5	91.9	3B区ミゾ
18	磨石	砂岩	64.5×44.0×38.5	32.8	9B区ミゾ内	37	磨石	多孔質安山岩	41.1×54.3×23.9	62.7	8B区ミゾ
19	磨石	磨灰岩	49.5×49.8×26.7	82.8	460ミゾ	38	磨石	多孔質安山岩	41.0×42.5×28.4	91.9	381

## 2) 弥生時代(第6図・図版5)

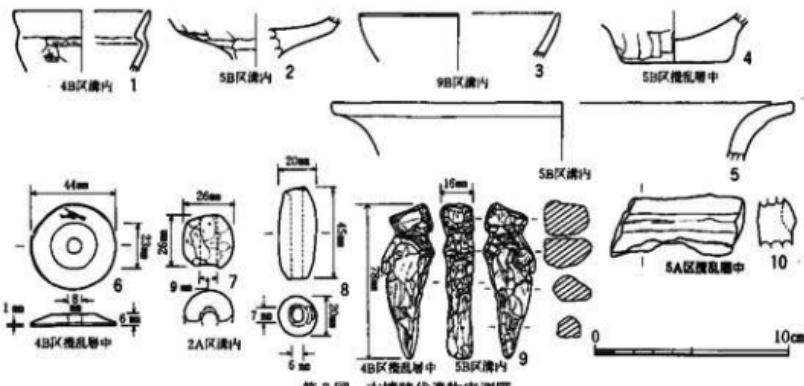
調査区内より土器片が21点検出されたが、器形を窺えるものはほとんどなく、すべて小破片である。遺構の検出はなかった。

1は、4本単位の櫛状の文様と縄文(R)を斜位に施文。2は、ハケ整形痕と押捺状の刻目を施文。3は、縄文結節部と無文帯をはさんで縄文を施文。4は縄文施文。5は附加条縄文を施文。6は櫛状工具による鋸齒状文の下に幅4mmの無文帯。更に縄文を施文。7は無文帯に縄文を施文。8は縄文(R)を斜位、横位に施文。9は底部破片で、縄文を横位に施文。底面に木葉痕有り。10は無文で縦位にハケ目痕有り。11は底部で、縄文を斜位に施文する。

いずれも弥生時代後期の所産である。



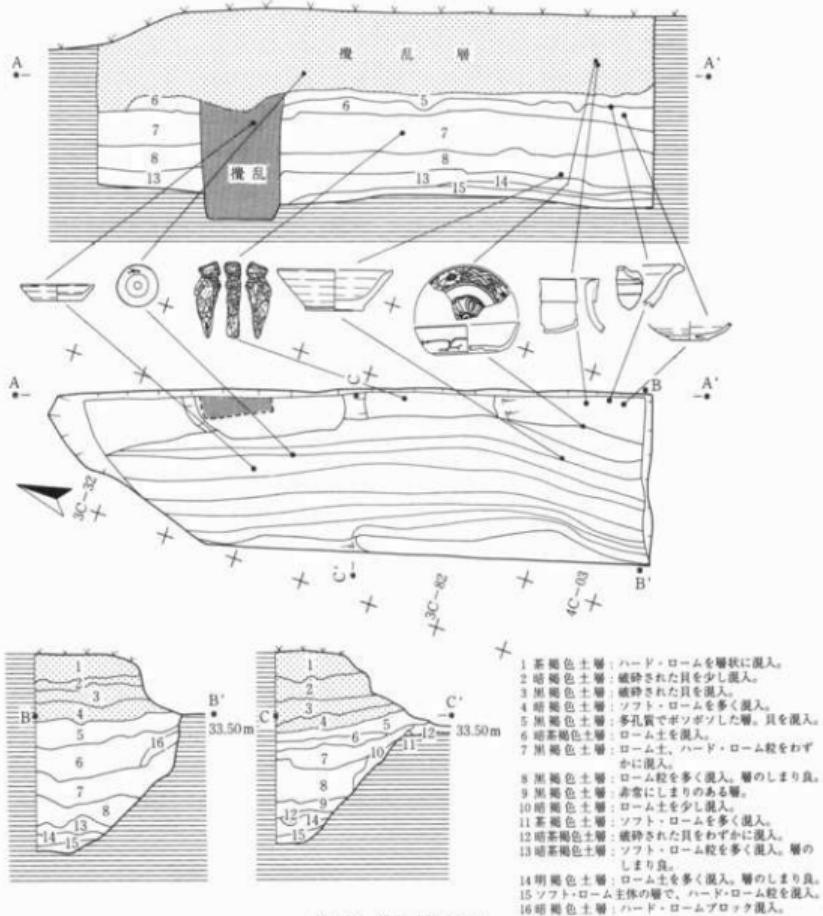
第6図 弥生土器拓影図



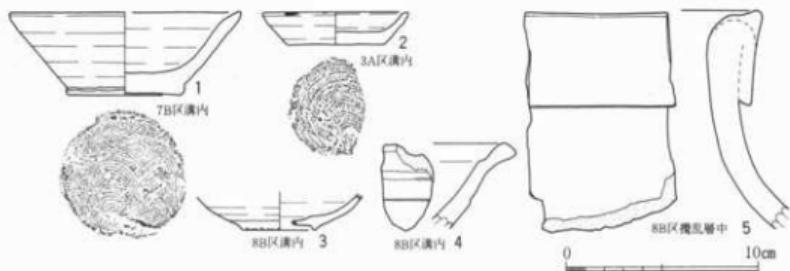
### 3) 古墳時代（第7図・図版5-3、7）

調査区内より200点余りの土師器の出土がみられたが、器形を窺えるものは、ごくわずかですべて小破片である。時期についても明確にできないものが多い。

1は壇で口径は推定で8cm。口縁部は内外面横ナデ。体部は外面ヘラ削り、内面はナデ。約 $\frac{1}{5}$ 残存。2は高壇の壊部で、外面にヘラ削り痕、内面はナデ。砂粒が多く混入。3は壇で、 $\frac{1}{5}$ 残存。4は底部で、外面はヘラ削り、内面は削り後ナデを加える。5は壇の口縁部で口径は推定で24cm。6は筋錘車形石製品と考えられ凝灰質頁岩製で、同心円状に段を有し有段面側は研磨による光沢が顕著で、放射状の擦痕がみられる。7は土玉片で、ほぼ球状を呈しヘラ削り痕が残る。8は土製のおもりで、やや偏平な貫通孔がある。9は灰青色の滑石製で未製品である。上端に風化した自然面が残る。上端から約15mmの部位に上下から小刀状工具で刻みを加え、くびれ部を作出し、さらに上端から25mmの部分を中心にして2つの小瘤状の形を削出して何らかの形象を意図しているようにも見えるが、刀子の未製品の可能性もある。11は埴輪片で、凸帯部である。この1点のみが検出された。6世紀代の所産か。



第8図 溝状遺構実測図



第9図 中世遺物実測図

#### 4) 中世(第8・9図・図版7-3~6)

遺構：ほぼ調査区に平行して溝状遺構の一部を検出した。検出面は、擾乱層(堆土)下のソフトローム面であり、貝層保存箇所の前庭とはほぼ同一レベル上にあたる。

溝は、調査区北側では埋設施設のU字溝と木の根により一部調査ができなかつたが南北両方向に調査区外へとさらに続いている。確認面から底面までは、110cmを測る。底面は、平坦ではなく10cm前後のなだらかな凹凸がみられた。幅は、調査区の関係で確認できなかつたが、断面形は逆台形を呈する。おそらくこの溝は、西の城の空堀の一部を構成する遺構として捉えることができるものであろうが、その詳細を把握するまでには至っていない。遺物としては縄文早期の土器片・円錐・土師器、中世陶磁器、石製模造品等が出土した。

遺物：1は溝底面から約35cm上のレベルから出土した。器高4.2cm、口径11.8cm、底径6cmで体部はやや直線的に開く。胎土に金雲母を混入。暗灰褐色を呈する。2は小皿で器高1.7cm、口径は推定7.6cm、底径も推定で5cm。口唇部に油煙によると考えられる黒色のススが付着。灯明皿として使用されたものか。茶褐色を呈する。3は東海地方北部系山茶碗で、底径4.8cm、台径3.9cm。体部は3mmと薄手で灰色を呈し、硬質。初高台付きで整形痕が残る。4は折縁の深皿片で、口唇部が外反する。灰釉が観察できる範囲の全面に施される。5は常滑の大甕の口縁部破片で外面には自然釉がかかる。内面は噴出しで鉄輪調。同一個体と考えられる体部破片が他に3点出土している。

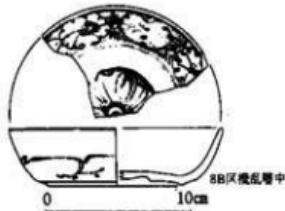
これらは13世紀中葉から15世紀後半の時期にそれぞれ由来するものである。

#### 5) 近世(第10図・図版7-7)

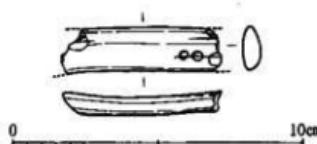
擾乱層中から1点のみ出土した。蛇目凹形高台付きの伊万里染付皿で、器高3.9cm、口径は推定で14.8cm、底径は推定で9cm。染付けの筆の濃い部分は銀化している。内面底部無地部分にあるキズは砂目か。18世紀後半の所産であろう。

#### 6) 自然遺物(第11図・図版7-8)

擾乱層中からヤマトシジミを多数検出した他、哺乳類の骨片を1点のみ検出した。これも堆土中出土である。骨の破碎された両端には径3mmほどの曲形とみられる痕が4箇所に残っている。



第10図 近世陶器実測図



第11図 自然遺物実測図

## IV まとめ

西の城貝塚は、地元では以前からその存在は知られていたが、昭和26年に早稲田大学考古学研究室が踏査を行い、縄文早期の貝塚であることを確認した遺跡で、昭和29年に西村正衛、江坂輝弥、芹沢長介の各氏が第1次調査を行った。調査の結果、貝塚は井草式期から稻荷台式期の間に形成されたこと。井草式土器と稻荷台式土器の層序関係が明らかにされたこと。井草式を細分する必要が生じたことなどの成果を得た。また、局部磨製石斧・牙器・熱を受けた円錐等が、貝層中や貝層上部の黒色土中から検出され、自然遺物としてはヤマトシジミを主体として、鹹水産貝類11種、淡水産貝類3種、陸産貝類4種が明かとされ、他に鳥類、哺乳類の骨片、魚類の脊椎骨、鱗及び淡水産魚類の咽頭歯片を検出した。昭和30年の第15回日本考古学会総会の研究発表で、西村正衛氏は縄文式土器の他にも弥生式土器、土師器等が古墳封土の下部から出土したとの報告をおこなっている。今回の調査でも攪乱層中や溝内からこの時期の遺物を確認し、その一部を報告した。昭和30年には神崎町域の古墳の踏査が行われ、230基以上が確認された。西の城の所在する台地上にも20基以上の古墳が存在することが報告されている。昭和38年には古墳の封土を相当量取り除いて貝層の性格を明らかにし、その一方で貝層の一部を保存することを目的とした第2次調査が行われ、井草式期の竪穴住居跡と溝状造構の一部を調査した。この時C14年代測定法による測定をヤマトシジミと木炭粉末を含む土によって行い、各々8380±190B.Pと8480±190B.Pの数値をえている。昭和46年にはこの地に神崎青年の家が建設されることになり、そのための造構確認調査が実施されて、縄文式土器・石器とともに土師器を伴う歴史時代の住居跡が確認されたが、この時の調査の範囲、確認した住居跡の位置等の報告は無く、詳細は不明である。昭和49年には、西の城跡を中心とした緊急調査として、造構確認調査が実施された。この調査は城跡の造構観察と造構の一部を発掘し記録することを主眼としたもので、地形測量とトレーンチ調査を実施して土壘の構築状態を記録した。この時にかなり改変された古墳の墳丘上から主体部を検出した。主体部からは平縁白銅質の内向花文鏡（彷製鏡）と鉄鎌が出土した。土師器の壺と土玉も墳丘から出土した。その後、墳丘や周溝の調査もされないまま青年の家が建設され、この古墳の調査の機会は永遠に失われてしまった。今回の調査は、文化研修施設としての活用をはかけて、現在の貝層部分と住居跡の上屋を改修しようとするもので、新しく建設される建物の基礎部にあたる範囲の調査を実施した。

調査の結果、縄文早期から近世に至るまでの遺物を検出したが、溝内出土遺物の一部の他はプライマリーな状態を保っているとは言い難く、本報告書ではもっぱら遺物の記載に終始した感は否めず、昭和29年と38年の調査に新たな知見を加えることはできなかった。

溝状造構は、その出土遺物から中世として扱ったが、15世紀後半にはほとんど埋没した状態となっていることは明かで、これは西の城の改修や廢棄、廃絶によるものと考えざるを得ない。

が、古墳の周溝である可能性もわずかに残している。

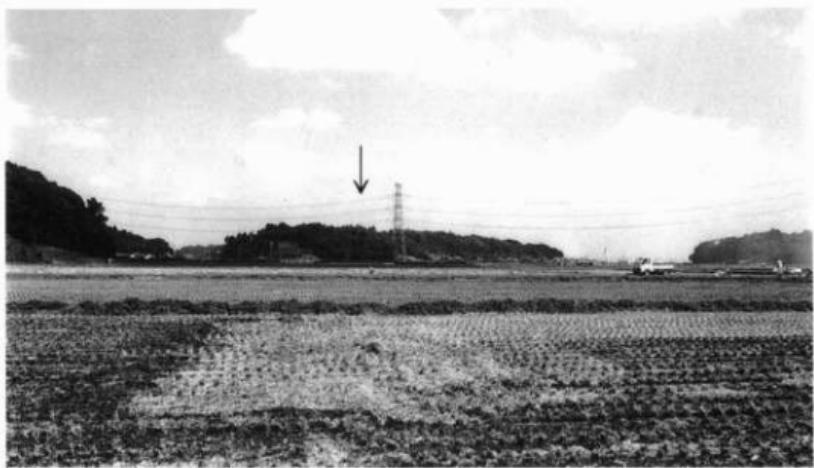
#### 参考・引用文献等一覧

- 吉田 格 「井草式土器について」『武藏野研究』6・7合併号 1951  
西村 正衛 「千葉県香取郡西之城貝塚」『日本考古学学会叢報』別編4 1955  
吉田 格 「千葉県の台貝塚」『石器時代』第1号 1955  
西村正衛他 「千葉県西之城貝塚」『石器時代』第2号 1955  
西村正衛他 「日本最古のシジミの貝塚」『科学朝日』1955  
芹澤 長介 「神奈川県大丸遺跡の研究」『駿台史学』第7号 1956  
赤星直也 「横須賀市平根山遺跡」横須賀市博物館 1958  
岡本 勇 「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」横須賀市博物館 1959  
石橋 謙治 「千葉県神崎町古墳の概要」『古代』31号 1959  
早稲田大学考古学研究室 「印籠手質」早大考古学研究室報告第8号 1961  
杉原莊介他 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部 1962  
西村 正衛 「千葉県香取郡神崎町西之城遺跡」『古代』第四十五・四十六合併号 1965  
山室 宗一 「中世城郭の研究」 1965  
千葉県教育委員会 「千葉県香取郡下郷町大日山古墳」 1970  
千葉県教育委員会 「千葉県香取郡神崎町舟塚原古墳第一次発掘調査概報」 1971  
武田古墳群発掘調査団 「武田古墳群発掘調査概報」 1972  
千葉県教育委員会 「千葉県香取郡神崎町神崎城遺跡調査報告書」 1974  
熊野 正也 「南関東地方における弥生文化の研究(1)ー佐倉市臼井南遺跡出土の土器ー」『史館』第四号 1974  
白石市史編纂委員会 「白石市史」別巻考古資料篇 1976  
江原台第一遺跡発掘調査団 「江原台」 1979  
西川 博幸 「三戸式土器の研究ー千葉県舟塚原古墳封土出土土器を中心としてー」『古代探査』1980  
宮 重行・池田大助他 「木の根」(財)千葉県文化財センター 1981  
神崎町教育委員会 「神崎町西の城貝塚保存整備報告書」 1982  
西村 正衛 「石器時代における利根川下流域の研究」 1984  
佐賀県立九州陶磁文化館 「国内出土の肥前陶器」 1984  
(財)千葉県文化財センター 「縄文時代(1)」房総考古学ライブラリー2 1985  
愛知考古学講話会 「マージナル」 No.7 1987  
(財)千葉県文化財センター 「弥生時代」房総考古学ライブラリー4 1989  
千葉県教育委員会 「千葉県所在古墳詳細分布調査報告書」 1990  
蘆戸市教育委員会 「尾呂」 1990  
(財)千葉県文化財センター 「古墳時代(1)」房総考古学ライブラリー5 1990  
原田 昌幸 「熱糸文系土器様式」 1991

# 写 真 図 版



道路周辺航空写真（昭和50年 撮影）



遺跡遠景（南から）



遺跡近景（南から）



調査風景



遺物出土状況（擾乱層中）



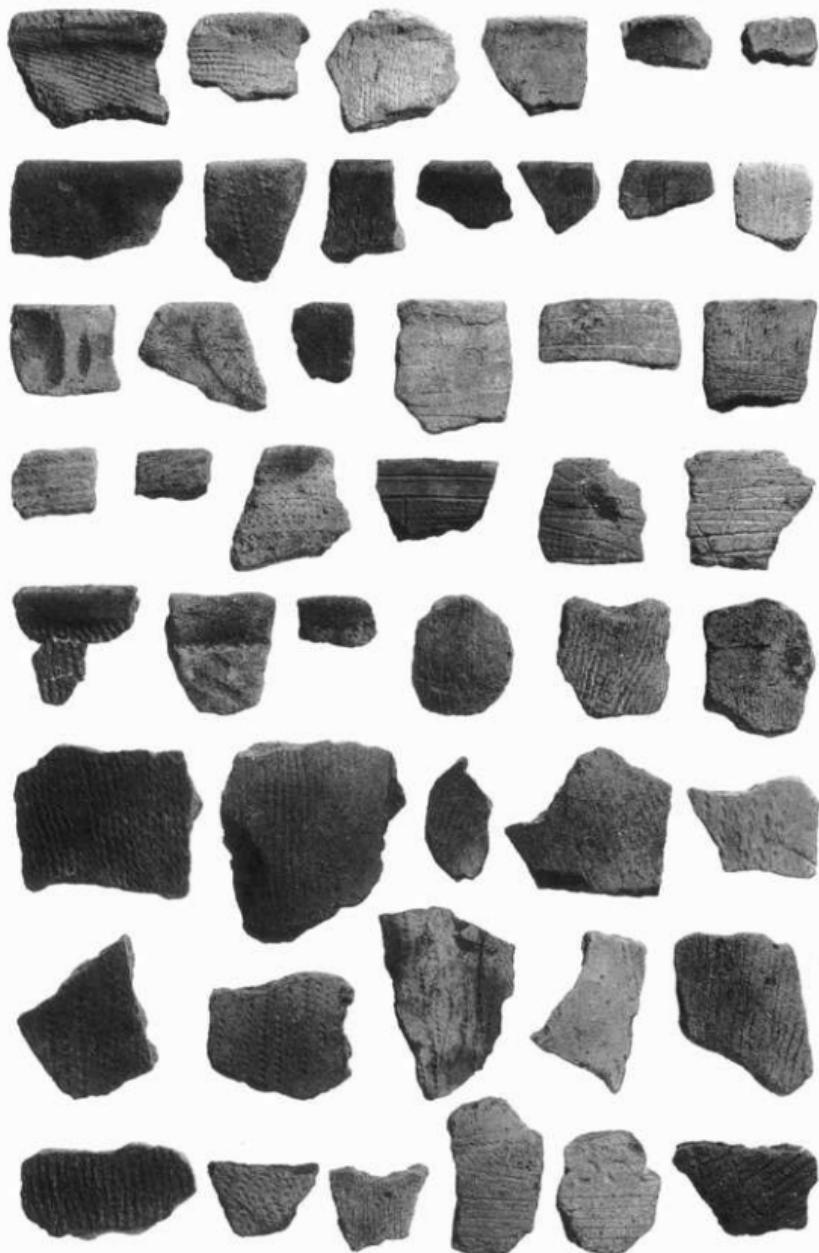
遺物出土状況（溝内）



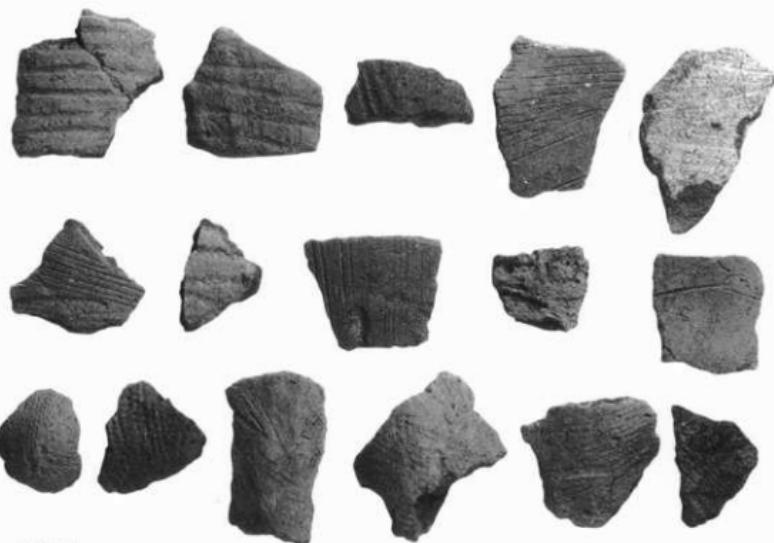
溝状遺構（北から）



溝状遺構（南から）



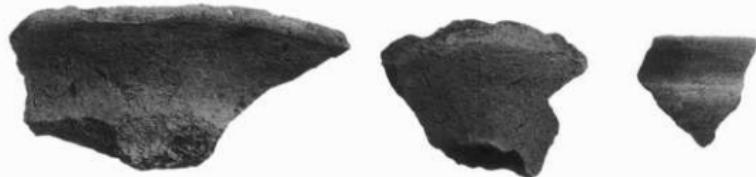
绳文土器



1. 縄文土器



2. 淀生土器



3. 古墳時代土師器



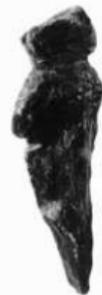
縄文時代出土石器（1）



縄文時代出土石器（2）



1



2

5

3

6

4



7

8



千葉県文化財センター調査報告第217集

神崎町西の城貝塚

---

平成4年3月23日 印刷

平成4年3月31日 発行

発 行 千葉県教育庁生涯学習部社会教育課  
千葉市中央4-13-28

編 集 財團法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡無番地

印 刷 有限会社 ミリオン印刷  
千葉市南町3-4-2

---

神崎町西の城貝塚正誤表

頁	行	誤	正
4	23	は丸頭状で、撲糸( i )を浅く	撲糸( ī )を
7	14	し、羽条を呈する	し、羽状を呈する
8	31	回転施文して羽条文を	羽状文を
9	11	5 は片刃の打製……	6 は片刃の打製……